令和６年度　第２回米子市の認知症施策を考える会（オレンジの会）
議事録

日　時：令和７年２月１７日（月）午後２時３０分～
場　所：米子市役所第２庁舎　２階第２会議室
出席者：委員（１２名）
髙田照男（会長）、廣田裕（副会長）、田住英之、川島雅弘、木村留美子、吉田英司、山本剛三、米村功、松本栄美子、前田朋子、森江佳奈、吉野靖子、大濱伸也
オブザーバー（２名）
中本道子、織奥奈々
事務局（４名）
足立長寿社会課長、遠藤課長補佐、松田主任、長門主任
傍聴者：２名

１　開会・会議の成立（午後２時３０分）
＜事務局＞
・開会
・全１５名委員のうち、１２名の委員の出席を確認、過半数の委員の出席により会議が成立していることを報告。

２　長寿社会課長あいさつ【省略】

３　議題
（１）認知症施策の推進について（案）
（米子市からの説明）
認知症施策の推進について、委員の皆様からご意見をいただきたい。

（髙田会長）
ワークショップの具体像はどのように考えているか。
（米子市）
ワークショップについては、既存の認知症本人ミーティングや家族のつどい、認知症カフェ等の認知症の本人・家族が集まる場を活用し、日常生活における希望や課題等について話し合うということを考えている。
（廣田副会長）
オレンジの会について、年２回の開催だけでは、会の進捗が分からないため、メーリングリスト等で委員に進捗を共有する等の対応をお願いしたい。
（米子市）

委員の皆様の了解が得られるようであれば、メールでの情報共有等について検討したい。

（髙田会長）

認知症という診断を受けて生活のしづらさを感じている人に、どのような支援やどのような地域をつくっていくか。また、認知症をどうすれば予防できるか、進行を遅らせることができるかを考えていくことも大切だと考えており、認知症予防についてもセットで考えていかないと物足りなさを感じる。

（米村委員）

最初の視点として、認知症になりたいという人はいない。認知症になりたくてなっている人はおらず、本人たちがどんな気持ちで生活しているのかを考えた方が良い。

（吉野委員）

ワークショップの開催について、認知症本人ミーティングや家族のつどい、認知症カフェに、どんな人が来て話をするのか。また、それらをワークショップとして開催しないときに出た意見等はどうするのか聞きたい。

（米子市）

ワークショップについては、市の職員が参加しようと考えている。既存の取り組みをワークショップとしない場合についても、本人や家族が集まる場に市の職員も積極的に参加し意見を聞きたいと思っている。

（吉野委員）

例えば、県内の他市町村では、家族のつどいや認知症カフェに包括が毎回参加している。支援者が実際にそのような場に出ていかないと、相談を受けて対応するだけでは足りないと思う。米子市だけでやれることにも限界があるため、関係機関を増やしていかなければいけない。

（米子市）

家族のつどいや認知症カフェの実施については、地域包括支援センターとの連携も検討していきたい。

（前田委員）

ヒアリング・調査の中に医療機関がないのは理由はあるか。認知症と診断されても必ずしも地域包括支援センター等に繋がるわけではないため、医療が支援している場合も多いと考える。

（米子市）

医療機関を意図的に除いていたわけではない。意見をいただいたため、医療機関についても追加したい。

（髙田委員）

国の示す「新しい認知症観」という言葉が引っかかる。これまでの認知症観がどうで、新しい部分はどこなのか。「自分ごととして考える」ということは、認知症の人もだが、認知症でない人にどんな風に意識付けていき、認知症の人をどう支えていくのか、あるいは認知症という括りでいいのかが、新たに今回提起されるような気がする。米村委員の発言でもあっ

たが、誰も認知症になりたい人はおらず、認知症と見られること自体が不安や怒りの一因となることがあると思う。「新しい認知症観」とは、これまでとは違ったファクターを求めているのだと感じる。どういう要素を入れ込んだら、認知症の人もそうでない人も、等しく幸せに生きれるかを検討していただき、計画等に盛り込んでもらいたい。

（森江委員）

鳥取大学附属病院で毎年やっている認知症の人の作品展を見に行っているが、身近な場所でも、認知症の人が活躍できる機会が増えるといいと感じている。RUNTOMO では、認知症の人が昼食を作られたり、タスキを縫ったりしておられ、認知症になってもできることはたくさんあると思う。

（髙田会長）

最終的には、認知症だからというわけではなく、仲間として活用できて自分の力が発揮できるのが理想だと思う。そうした機会を増やしていけるような枠組みがあればいいと考える。

（川島委員）

認知症自体は、以前に比べて認識されるようになったが、認知症の正しい理解や「新しい認知症観」はまだまだ浸透していないように感じる。認知症についての情報を学べる場所にスムーズ繋げるようになればいいと考える。

ワークショップで認知症の人や家族の意見を吸い上げるのはいいと思う。一方で、誰もが認知症になり得るんだということを広めていく必要がある。

（髙田会長）

啓発はどこかのタイミングで力を入れる必要はあると感じる。

（大濱委員）

認知症と聞くと、重度になって排泄の失敗があったり、大声を出したりというイメージがついてしまっている。そこから認知症になりたくないという考えに繋がっている。違和感を感じたところで、専門医等に相談してほしいが、認知症という診断を付けられたくないということがネックになっている。間違ったイメージが先行してしまっているので、認知症はだれでもなりうるというイメージ戦略が大切。

地域包括支援センターでは、小学生等に認知症の絵本教室をしていて、認知症になってもできることがあるということを伝え、最後に自分の親に聞いた内容を話してねと伝えている。今の働く世代の方への啓発が課題であるため、このような取り組みを継続していかなければいけない。

認知症になってもしょうがないと言えて、周りが助けてくれる安心感を持つことができれば理想であると思う。他人に厳しい社会になってきていると感じるため、認知症に限らずもっと寛容な社会になればいいと考える。

（松本委員）

人に何を言われても自分は自分だと思っている。いろんな人に出会って、いろんな考えがあるんだと分かれば安心できるし、できないことがあれば教えてくださいと言えるようになると、できるようになることもある。認知症は少しずつ進んでいるが、それは仕方ないこと

なので、自分でできるときはできることをやりたいと考えている。

（吉野委員）

松本委員は、認知症がありながらも周りの協力を得て、長年仕事を続けておられる。

（木村委員）

認知症の有無を問わず、皆が望む生活ができるようにすることが大事。認知症施策として進めたことを広く啓発し、一部の人は知っていて、一部の人は関心がないという状況にならないようにする必要がある。施策の推進と平行して啓発が大事だと感じた。

（田住委員）

鳥取県作業療法士会としては、初期集中支援やにっこりの会で認知症に関わっている。RUNTOMO などのインフォーマルな機会を通じて、認知症の人や聴覚障がいを持っている人、就労支援事業所に通っている障がいのある人、市民等が同じ立場で場を共有できることを意識して進めている。

自分ごととして考えるという視点では、認知症の本人の丹野さんが VR を監修し、認知症の体験をする取り組みを進めている。若い世代への啓発として、認知症の大変さを理解するだけでなく、自分ならどんな声掛けや支援があったらいいか考える機会を提供している。認知症の人がどうやったら暮らしやすいかというより、自分だったら数年後どこでどんな暮らしがしたいかを考えてみると良いと思う。

今回のワークショップも多機関が連動し、認知症の本人や家族の声を聞ける貴重な機会になると思う。

（前田委員）

鳥取大学の性質上、本人が気づいて受診することが多い。診断を受けるのは良いが、デイ・サービスの利用はまだ先だと考えている方が多く、課題だと感じている。米子市のフレイル予防事業が活用できるのではないかと感じており、病院でフレイル度チェックをやることもあるが、こぼれ落ちている人もあると思う。新しい取り組みを行うのも良いが、既にある取り組みを活用するのも良いと思う。

（山本委員）

認知症の人の行方不明事案が多く、1 日に 1 件はあるんじゃないかと思う。ご家族の支援がある人はいいが、一人暮らしの方等の場合に警察としても対応に困ることが多い。警察で認知症の人の対応をした際は、地域包括支援センターに情報提供しているところである。認知症の人の対応は難しいこともあるが、関係機関へのつなぎ役として協力していきたい。

（髙田会長）

MCI や違和感に最初に気づく機会として、免許センターが多いと思うが、状況はどうか。

（吉田委員）

まず、委員の皆様のいろんな立場があり、関わり方や視点が異なるため、施策としてその意見をまとめていく難しさを感じた。

免許センターとしては、軽度から重度まで認知症の状態によって対応の仕方が分かれていくようになっている。施策についても、認知症の状態に応じた取り組みをするということも、

1つの方法であると感じた。

（米村委員）

地道に取り組みを積み上げていくことが大事だと感じた。少々失敗しても皆で頑張っていけば、いい方向に進んでいくのではないか。

（廣田委員）

認知症初期集中支援事業に参加しているが、初期集中と言いながら、困難ケースが取り上げられることが多い。時には、周りにストレスを与えてしまう認知症の人のケースもあるため、そのような人たちには確実に対応できる社会にしていかなければいけない。

時々同行訪問してほしいという要請があり、往診料を取るようにしているが、市からもインセンティブがあれば、困難ケースにも積極的に関わっていけると思う。

将来、認知症の人や独居高齢者が増えてきて、施設が受け入れられず、そこで働く職員が減っていくことが予想される。そのような米子市の現状を聞いていただいて、施策を進めてもらいたい。

（髙田会長）

本日、今後のロードマップ案を説明いただいたが、いろんな視点の意見をどのように盛り込むかが課題。医療や介護、当事者等、様々な立場からの意見を計画に盛り込んでいただくこと期待している。

（米子市）

本日いただいた意見を踏まえて、ロードマップ案を修正したい。オレンジの会の場だけでなく、各分野の委員の皆様に個別に意見を伺うこともあるかと思う。

認知症施策と一言で言っても、様々な視点でやるべきことがある。その内容を今後第10期計画を検討していく中で、具体的な取り組みとして考えていきたいと思っている。